

浄土

monthly
JÔDO

April 2008

4

法然上人讃仰会





学問ははじめてみたつるは、
きわめて大事なり。
師の説を伝習するはやすきなり。

〔修学についての御物語其一・昭法全四八五〕



鬼海弘雄『浄土』2008年年間表紙写真の人

きかいひろお 1945年山形県寒河江市生まれ

法政大学文学部哲学科卒業。山形県職員を辞して、トラック運転手、造船所工員、遠洋マグロ漁船乗組員など様々な職業を経て写真家に。1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞受賞。

写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版1987年 『India』みすず書房1992年 『や・ち
また：王たちの回廊』みすず書房1996年 『東京迷路』小学館1999年 『印度や月山』
白水社1999年 『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館2001年 『Persona』草
思社2003年 『へるそな』草思社2005年 『In-between8 鬼海弘雄 ボルトガル、マル
タ』EU・ジャパンフェスト日本委員会2005年 『東京夢譚』草思社2007年 『集合住
宅物語』みすず書房2004年 (撮影・鬼海弘雄 文：植田実) 『メッセージ』樹立社
2006年 (撮影・鬼海弘雄 文：都はるみ)

浄土

2008/4月号 目次

浄土への道すじ	金子寛哉	2
仏教コラム	大室了皓	9
教育回想	高木悦男	10
会いたい人 すまけいさん③	関 容子	16
江戸を歩く 第十五回	森 清鑑	24
響流十方	村田康順	32
法然上人とその時代 壇の浦へ	石丸晶子	36
Jフォーラム		43
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよろう	47
編集後記		48



表紙題字=中村康隆前浄土門主
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

浄土への 道すじ

法然上人から、
今日への
メッセージ

元大正大学教授
神奈川・善教寺住職

金子寛哉



法然上人が黒田の聖人に送られた書簡といわれる御法語「一紙小消息」は、次のような一文を以って書きはじめられている。

末代の衆生を往生極楽の機にあてて見るに、

- ① 行すくなしとても疑うべからず。一念十念にたりぬべし。
- ② 罪人なりとても疑うべからず。罪根ふかきをもきらわじとの給えり。
- ③ 時くだれりとても疑うべからず。法滅以後の衆生尚もて往生すべし、況んや近來をや。
- ④ わがみわろしとても疑うべからず。自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりとの給えり。

(①)④の数字は筆者)

この書簡は法然上人が黒田の聖人に宛てた書簡であつて、その内容はもちろん法然上人当時の事象を中心に述べていることはいふまでもない。しかし今の文の冒頭に「末代の衆生」とあり、また文中に「法滅以後の衆生」とあることからすれば、この文の内容はただ単に法然上人と同時代の黒田の聖人一人のみに限らず、浄土教信仰を持つものであれば、平成の今日の衆生までも含めて考えることが可能であらう。このような解釈をするならば、法然上人が、今日の筆者を含めた多くの人々に当てた書簡であるとも受け取れることになる。本稿では以上のような発想のもと、「一紙小消息」を法然上人が今日の人々に宛てた書簡として受け取ってみようと思う。

いずれの信仰においても、その教えに疑いを持つてゐる間は、到底その教えを信ずる心が起らないものである。このことは浄土教信仰においても例外ではない。その意味で、法然上人は最初に浄土教信仰を持つ者（往生極楽の機、極楽往生を願う人）に対して、その信者が持つであらう「疑心」について一つ一つ取り上げ、それらのことについては心配すべきではないことを説いているのである。

自らの日頃の行いを振り返ってみよう。頭の中では阿弥陀仏の本願を理解しつつも、全身全霊で心の底から念仏を称えたことは、皆無とはいわないまでも、正直いつて中々あることではない。また、日頃の行いを考えてみても、表立った罪とまでは行かぬまでも、日常生活をする上では、仏様の眼から見れば、してはならないようなことをし、考えてはならないようなことも考えざるを得ない場面に出逢うことがしばしばである。さらに、万やむを得ず重罪を犯してしまった場合には、なおさら往生出来ないのではないかと疑うことになる。近頃の世相を見ると、あつてはならないような事象が余りにも多く次々に起こっている。仏典の経説によると正法・像法・末法の三時説を説いているが、現在はその中の第三番目の末法の世に当たると言われている。我々はいつも「このような時代に生きている今日の我々が果たして阿弥陀仏のいられる、極楽浄土に往生できるのであるか」と疑ってしまうものである。

このような疑いの心に対して、法然上人は、念仏行は「一念若しくは十念でも良い」、罪は「どんなに深くとも嫌うことはない」といつている。そして時代に対しては「末法万年の後の人々であつても念仏を称える者は必ず往生出来る」というように、阿弥陀仏の教えを経説や祖師の解釈をもとに、法然上人ご自身によって咀嚼された信念を中心に、一つ一つそれらの疑心に対して、心配すべきでないことを論じているのである。

このように、最初に念仏信仰に対する疑いの心を取り除いた上で、次に念仏信仰による浄土往生の教えの道筋を具体的に説き勧めている。今の文に続いて、

⑤ 十方に浄土多けれど西方を願うは、十悪五逆の衆生の生まるる故なり。

⑥ 諸仏の中に弥陀に帰し奉るは、三念五念に至るまでみずから来迎し給う故なり。

⑦ 諸行の中に念仏を用うるは、彼の仏の本願なる故なり。

(⑤)⑦の数字は筆者)

と述べているのである。この文の意味するところは、法然上人ご自身が、阿弥陀仏の本願念仏によって極楽世界へ往生することを願うようになった自らの浄土教信仰を得るまでの道すじを述べたものであると言っても良いように思われる。今この文を三段に区切って考えてみたいと思う。

⑤「十方に浄土多けれど西方を願うは、十悪五逆の衆生の生るる故なり」というのは、大乘仏教では十方諸仏の存在を認め、その諸仏がそれぞれ浄土を構えていることを認めているのである。したがって浄土へ往生を願うとはいっても、どの仏の浄土へ往生することを願うのかということによって、その信仰形態もおのずと変わってくることになる。善導大師が活躍された頃の中国では、浄土へ往生を願う信仰として「阿弥陀仏の極楽浄土へ往生しよう」と願うものと、「弥勒の兜率天へ往生しよう」と願う、二つの往生信仰が流布していた。そのような往生信仰は日本にも伝わり、法然上人の頃には兜率天に上生することを願う弥勒信仰が流布していたのである。またそのほかにも、種々の經典に説かれる、諸仏の浄土へ往生する信仰が考えられていたものと思われる。そのような中で法然上人は西方極楽浄土を択ばれたのである。『選択集』第二章段の「雑行」について説くところで、**「雑とはこれ純ら極楽の行にあらず、人天及び三乗に通じ、亦十方の浄土に通ず」と述べ、雑行を行ずる者は十方浄土に往生するのであるということ**を、法然上人は充分に意識されていたのである。

また何故に極楽浄土を択ばれたのかというと、極楽浄土には十悪罪や五逆罪を犯した者でも往生させてくださるからであるというのである。当時の一般的な考え方からすれば、浄土は諸仏菩薩の住む世界であって、修行を積まない一般の民衆が浄土の世界（『仏の世

界」に往生することなどは、到底考えられないことであつた。しかも十惡罪や五逆罪という世間的に見ても重い罪を犯した者などは、到底その世界に往生することは認められないとされていたのである。

しかし、法然上人がよりどころとした『觀無量壽經』の下品下生段に因ると、これ等の罪を犯した者でも往生することが認められているのである。以上のような理由によつて、この一段は法然上人が択ばれたことを述べている。このような考え方は今日の世相に当てはめて見ても充分説得力を持つのではないかと思う。

次の段の⑥「諸仏の中に弥陀に歸し奉るは、三念五念に至るまでみずから來迎し給う故なり。」という部分について考えてみよう。『無量壽經』の本願文に由ると、その第十八願に、「もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂（しんぎょう）して、わが國に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺をとらじ」といい、また第十九願には「十方の衆生、菩提心を發（おこ）して、もろもろの功德を修し、至心に發願して、わが國に生ぜんと欲せんに、壽終の時に臨んで、假令（もし）大衆のために圍繞（いによう）せられて、その人の前に現ぜずんば正覺を取らじ」と、その本願文に誓われているのである。つまり、阿彌陀仏の誓ひはこのように明確に人々が最後臨終の時には必ず來迎してくださると述べられているのだから、このような誓ひを立てられた阿彌陀仏に歸依するのであるというのである。

さらに『觀無量壽經』の九品段のうち、上品上生には、「彼の國に生ずる時、この人精進勇猛なるが故に阿彌陀如來、觀世音、大勢至、無數の化仏、百千の比丘、聲聞大衆、無數の諸天七寶の宮殿と與なり。觀世音菩薩は金剛台を執り、大勢至菩薩と與に行者の前に至り、阿彌陀仏は大光明を放つて行者の身を照らし諸々の菩薩と與に、手を授けて迎接し

たまふ」とのべている。このような阿弥陀仏の来迎については九品の各品にわたって述べているのである。法然上人はこのような経説をもとに自らの帰依する阿弥陀仏を諸仏の中から選ばれたのである。

次の⑦「諸行の中に念仏を用うるは、彼の仏の本願なる故なり」というのは、極楽浄土に往生するための行が種々ある中で何故に念仏行を用いるかということ、阿弥陀仏の本願に誓われた行だからであるというのである。これはいうまでもなく善導大師の『観経疏』に「二心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念念に捨てざる者、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」という文によっていることはいうまでもない。

このあと「一紙小消息」にはこの本願に乗じて極楽世界に往生出来ることの不思議さを述べ、さらに「本願に乗ずるためには、信心が深くなくてはならない。深く阿弥陀仏を信ずることによって今述べた三つのことも自然に具わって来るのである」と述べている。

今この書簡のここまでの趣旨を振り返ってみると、法然上人の『選択集』第十六章段のいわゆる「略選択」の文を思い出すのである。それによると

夫れ速やかに生死を離れんと欲すせば

二種の正法の中には且く聖道門を闍きて選んで浄土門にいれ。

浄土門に入らんと欲せば正雑二行の中には且らく諸々の雑行をなげうって正行に帰すべし。

正行を修せんと欲せば正助二業の中には猶助業を傍らにして、選んで正定を専らにすべし。

正定の業とは即ちこれ仏名を称するなり。名を称すれば必ず生ずることを得。

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1289
振替00180245231

仏の本願に依るが故なり(原漢文)

と記されている。文言に多少の異なりはあるが、恐らく黒田の聖人に送られた書簡の趣旨は、この「略選択」の意を踏まえて記されたものと思われる。そのように考えられるとすれば、実は『選択集』そのものも、法然上人から今日の我々に送られた書簡と考えて差し支えないのではないかと思われる。

法然上人の御言葉は御手紙であれ『選択集』であれ、常にその時代その時代の念仏者の心に「阿弥陀さまを疑うことなく、ただ一心にお念仏をとなえよ」と真っ直ぐに届くものがある。この平成の時代に、法然上人の御言葉は我々一人一人の心の中に、静かに優しく、それでいて強く響いている。そして百年後も千年後も「ナムアミダブツ」がこの世界に響き渡る間、法然上人の御言葉は人々の胸に届き続けることであろう。

コーサラ国の舍衛城にクリシャ・ゴータミーという女性がいた。子に恵まれな
い不運を嘆いていたが、漸く男子が授か
り幸せになった。ところがどうしたのか
愛児が急死してしまう。悲嘆のどん底に
落ちた彼女は、その子の死体を抱いて途
方にくれ、

「この子が生き返る薬を下さい」

と、出会う人々に頼み込んでいたところ、
たまたま祇園精舎から托鉢に回られてい
る釈尊に出会った。釈尊は、

「私が作ってあげよう」

狂喜した彼女に、

「だが作るには芥子種けしなながいる。しかしま
だ死者を出したことのない家の芥子種だ
よ」

喜び勇んで町へ飛び出し、その家を探
し回った。

夕方になり、疲れ果てた体で釈尊のも
とに帰って来た。そして言った、

「よく分かりました。もう薬は要りませ
ん。この子を安らかに眠らせてあげます」
穏やかな顔になって帰っていった。

諸行無常の教えを体で悟ったこのゴ
タミーに、私は頭を下げたくなる。

親を亡くし、また最愛の子や孫に先立
たれ、諸行無常の世の現実を知り尽くし
たつもりの私にしても、この教えだけで
は悲しみは去っていかかった。

救われたのは、念仏の教え、俱会一処、
浄土再会の教えだった。

念仏を唱えれば、懐かしい人々に浄土
で必ず会うことができる。

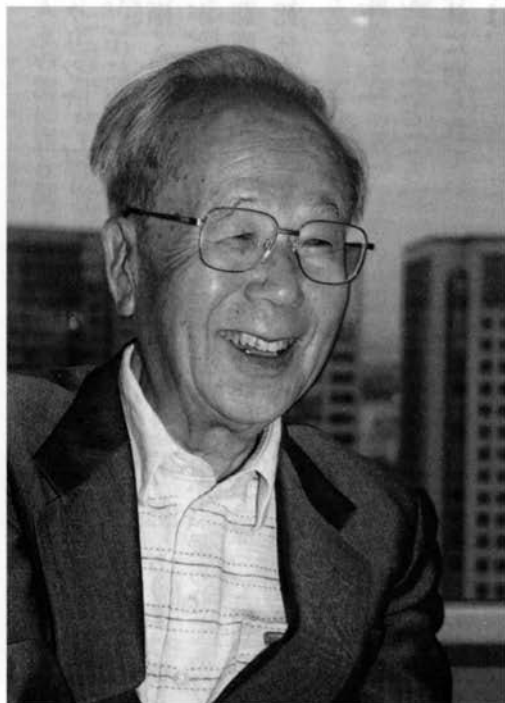
弥陀本願の念仏によって悲しみから立
直ることができたことに思いをいたし、
いまひたすらに合掌するのである。

教育回想

高木悦男

遺稿

1



乙武洋匡氏を小学校一年から四年まで担任された高木悦男氏は私の叔父である。乙武氏のベストセラー『五体不満足』の発行される少し前から、当誌で『身障者に学ぶ』として六回の連載（平成十年七月から十二月号）をして戴き、乙武氏の誕生から教育された四年間をご執筆戴いた。乙武氏本人の強さ、ご両親のすばらしさ、関係した人々の温かさ、そして共に学んだ子どもたち自身にどれだけ大きな教育ができたかなど、『五体不満足』を捕足してあまりある素晴らしい原稿であった。

その高木氏が暮れも押し詰まった十二月の二十九日、我が家に来訪した。ご自身の教職生活四十年を振り返って、ご自身の教育理念、方針を連載させていただけないかとお申し出であった。すでに第二回分の原稿はお書きであった。高木氏といえば乙武君である。当然先生にとっても乙武君は大きな存在で、四十年の中の四年はただの四年ではなく、四十年を凝縮した四年であったろう。我々にとっても乙武氏を中心に書いて戴いた方が、先生の特長が出ると思い、そうした原稿を依頼し、第一回目を乙武氏の話でお願いした。

そして年明けの元旦の朝、伯母からの電話で叔父が亡くなったことを知らされた。

遺稿 教育回想

昨年、「乙武さんの『週間子供ニュース』への出演が決まったので、是非先生からメッセージを戴きたい」と、NHKの担当者の訪問を受けた。

録画とりは2日間にわたり、当時の乙武君の様子や、乙武君を指導するに当たったの私の方を種種述べたが、その時は記憶が薄れ、正直思ひ出すのに苦労した。そこで、乙武君と共に生活した四年間を中心に、私の四十年間の教職生活における考え方を、まとめておこうと思った。

それはあまりにも突然の死であった。朝目覚めてこない叔父を起こしに行つて、既に亡くなつてゐる叔父を発見したそうだ。「虚血性心不全」、笑つてゐるかのようなお顔、布団の乱れも一切無く、夜中三時に本当に安らかに息を引き取つてしまわれた。「まさか」という「さか」が本当にあるということ突きつけられた感じであつた。

暮れにあればど元気で、連載への意欲満々だった叔父の最後の原稿をお贈りする。

編集子 長谷川岱潤

電動車椅子

乙武君を受け入れるに当たって、用賀小学校では区の教育委員会をお願いして、校舎内から校庭に出たり、体育館に行く通路、昇降口などにそれぞれスロープを付けてもらった。

従って乙武君は入学当時から電動車椅子が足の役目を果たし、学校内を自由に動き廻れるようになった。彼自身が著書『五体不満足』の中でも述べているように、休み時間校庭を電動車椅子で走り回る彼の後ろを、子どもたちは電動車椅子の珍しさも手伝って、ぞろぞろとくっついて歩いた。乙武君は「王様みたい」といってはしゃいでいた。そんな彼に私は、学校内で私の許可無く電動車椅子を使用することを禁止した。電動車椅子を取りあげたのである。それからの彼は大変だった。特に朝礼から帰るときなどは、彼一人校庭に取り残されるようになってしまった。真夏や真冬は温度が直にお尻に伝わり、彼には相当厳しかったことだろう。女子の先生など多くの人からかわいそうだという声が絶えずあがっていた。

しかし、乙武君は『五体不満足』の中で、「ボクが進学した中学・高校・大学は、いずれも障害者のための設備が整っている学校とは言えなかった。(中略) こうした自力での移動が可能となったのも、すべて高木先生の指導のおかげだったと思う。」と感謝の言葉を述べている。また最近のテレビでも彼は「今のボクがあるのは、高木先生が電動車椅子を取りあげてくれたおかげ」と言ってくれた。そのことについて当時を思い起こし、少し書いてみたいと思う。

私が彼から電動車椅子を禁じた理由は三つあった。

ひとつは、一年生の子どもも給食が始まると喜んで箸やスプーンを動かして、ほとんどの子どもが定まった時間内に食事をおわることが常であった。しかし乙武君は時間内ではパンは半分も食べられず、おかずも残すことが多かった。母親に聞くと「洋匡はパンを好まないの」という返事であった。小学校に上がったばかりの子どもにとって、大切にしなければならぬことは体力作りである、健康である。健康の基本はよく食べ、適当な運動と十分な睡眠である。私は彼が運動が足りないから食欲が起きないのではないかと、電動車椅子に対して疑問を持つようになったのである。

次に乙武君が学校生活を楽しいものにするために欠かすことが出来ないのが、良い友人関係をすることと考えた。多くの子どもは両足で運動場を走り回っているのに、乙武君は電動車椅子で走り回っている。これではよい友人関係はできないのではないかと、乙武君も両足を地面につけ他の子どもと同じ状況のもとで遊ぶことが、子ども同士の人間関係をつくるのに必要ではないかと考え、電動車椅子での生活を私は疑問視したのである。

またひとつは、長い目で見た場合学校生活を過ごしてゆくためには、電動車椅子だけを頼ったのでは無理ではないかと考えた。小学校でも高学年になると、音楽、家庭、図工は専科制になるためにどうしても車椅子での移動は無理になる。まして中学・高校・大学と進むにつれて、学校生活の一部でしか車椅子は使えなくなる。この先のことを考えた場合、自力である程度歩けることと、階段の上がり下がりではできるようにしておくことが大切ではないかと考えたのである。

小学校の教育指導を私は、健康第一であり、体力をつけること、生きてゆく力をつけること、そして良き友をつくることだと考えている。つまり目の前の今ではなく、将来にと



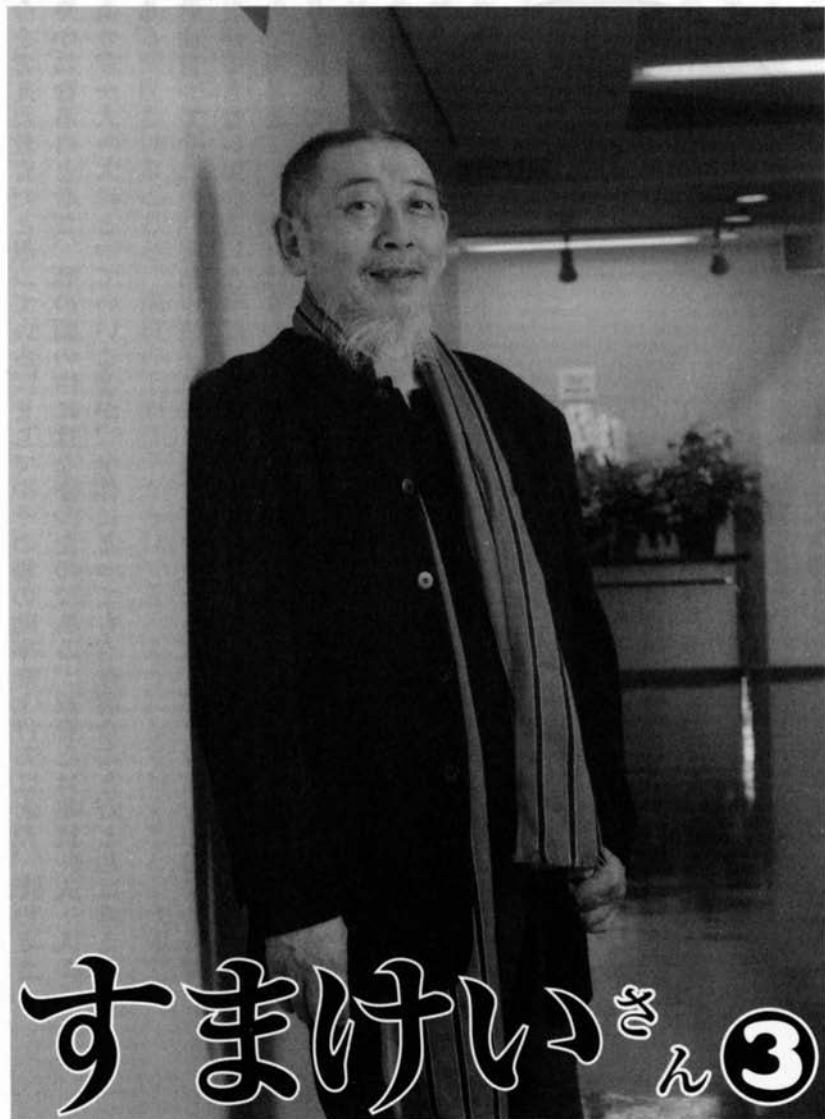
つての今を考えた教育だと思っている。ましてやその場の効率を上げることや、そのときだけ和やかになることなど、私の頭の中にはなかったのである。教育とは生徒一人一人のものであり、一人一人にとっていいことが、全体にとっても有意義なことだと私は考えたのである。

乙武君は言ってくれた「電動車椅子に乗り続けていたならば、ボクは電動車椅子から離れることができない障害者になっていたに違いない。そして、そうなったときの日常生活を想像してみると……。今とはまったく生活の「幅」が違っていただろうし、気持の上でのゆとりも違っていただろう」と。

(つづく)

連載

会いたい人 関 容子



すまけいじさん ③

昭和四十六年七月三十一日、「すまけいと
その仲間」の解散公演は、当時大きな話題を
呼んだ。新宿御苑前の四谷公会堂で一日だけ
の公演とあって、四百席の会場にすまけいフ
アンが千人以上も押しかけた、と新聞や雑誌
に報じられている。

「最初は仲間三人でリサイタルでもやるか、
って言うってたんだけど、それならいつそ解散
公演のほうがいいじゃないか、お祭り
気分で、ってまあいつもの調子ですよ。俺た
ち最初のうちは、ジャズみたいな、一概に言
葉で語れない芝居をやるうとしてた。つまり
アウトサイダーなんだけど、演出家によつて
整理されない、こぼれた部分を大切にすると
芝居しよう、としていたの。しかしそれもだ
んだん馴れ合いみたいになつてきて、だから
一度解散して一人になつて考えてみるのもい
いのかも、って。俺、必死になるのも、拘束
されるのも嫌いなもんでさ」

解散から八カ月後、すまさんはアートシア

ター新宿文化で『芸術版・吠え王くそーツク』
(内田栄一作)に出演する。これは以前に演
劇集団日本に客演したときの『吠え王オホー
ツク』のパロディー。

「デタラメバカのクソツタレー! とかつ
て、世の中に向つて声を限りに罵倒する。つ
まり俺自身が吠え王みたいなものですよね」

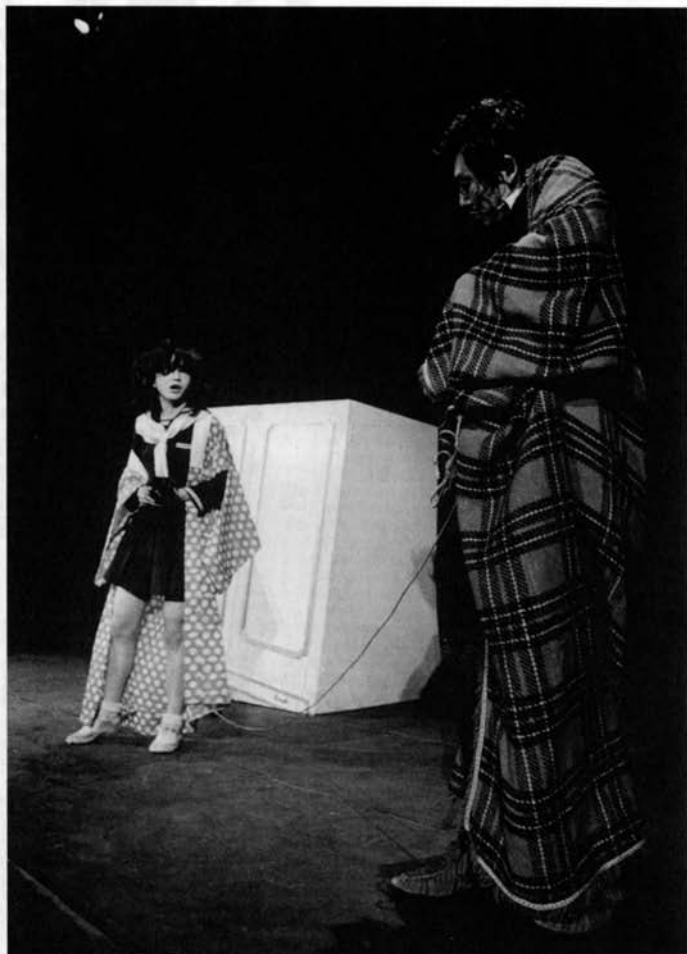
当時の新聞には、

「機関銃のように飛び出すおかしさと悲しさ
の入り混じるギャグ、アドリブ……身体の内
から絞り出すような声でしゃべる、しゃべる。
観客のほとんどはインテリだが、恥も外聞も
なくケラケラ笑い転げて、すまけいに翻弄さ
れている」

とあった。

そのインテリ観客の代表として、シエイク
スピア学者の小田島雄志さんにあのころのす
まさんの芝居について伺つてみた。

「たとえばオールビーの『動物園物語』を、
『贋作・動物園物語』としてすまけいが目茶



すまさんの奥さんはアングラ時代の役者仲間の石堂洋子さん。写真は「芸術版・吠え王くそツク」で、左が石堂さん、右がすまさん

苦茶にこわすわけだけど、そのこわし方に愛があつて、ペーソスが流れて、そこがなんともいいんだよね。かと思うとやたらに笑いとばして、その兼ね合いが何とも絶妙で面白いんだよね」

すまさんが観客の心を捉えるのは、怒りや嘲笑や皮肉に根ざした諧謔と、それら総てを大目にみようとする哀愁と、照れをオブラートにした愛嬌と、それらをうまく配分するセンスのよさによるのだろう。

すまさんはその後、十四年近くも演劇から遠ざかつていた。あんなに人気者だった人がなぜ？ と誰しもが思ったことだろう。

「なんてことないゴツタ煮の芝居で、コマーシャルとか語呂合せとか言葉遊びとか全部突っこんじやって、俺と軽いところで遊びませんか？ という芝居。しばらくはこの線で行こうかと思つてたけど、でも疲れたし、飽きたし、照れたしね。元々はつきりした方向性

がないんだし、ちゃんとした理論武装の根がないんだから、どこから突つかれてもいいようにはなつてない。俺、臆病なところあるからさ(笑)。ヘンに当つちやつて……くだらなく面白いとか、うまいとか、愛嬌があるとか、何かがなくちゃ当たらないから、あつたと言つてもいいのかな、と思ひながらも、たまたま当つたのかもしれないから、このまま悪ふざけを続けてやろうという気持ちと、偉そうなことを考へてるな、つて気持ちと両方出て、結局むきになつて突つこむとどつかへんな方向へ行きそうな気がしてきた。当分芝居はやめとこう、と思つたわけよ、あのときは」

役者をやめて、立ち食い蕎麦屋に一年、不動産屋に三か月勤め、一番長く続いたのがNHKのプリントセンターの下請け印刷所。台本の校正をする仕事だった。

「一生、台本の校正屋でかまわないと思つてたね。意外に単純作業とか、同じことの繰り返しに俺、強いんだ。指サックはめて耳を揃

えて製本も手伝ったり、結構そんなのうまかった。朝から晩まで働いて、大NHKさんには印刷屋はお前んとこだけじゃないんだよ、っていじめられて(笑)、徹夜するからたまの休みにはずつと寝てる。起きればウイスキーのボトルを横にデンと置いてテレビ見ながら、デタラメバカのクソツタレーと、相変らず吠え王やってたね(笑)」



舞台「いしいとしのぶ一たれ乞食」(清水邦夫作・平成19年シアター風姿花伝にて)のすまさんと南谷朝子さん

そんなすまさんを探し当てたのが、当時の井上ひさし夫人だった好子さん。その熱意に動かされて、昭和五十九年十二月にこまつ座に入る。翌年一月、なんの違和感もなく『日本人のへそ』に出演し、奇跡のカムバックと話題になった。

「ブランクを感じなかったか、とよく訊かれたけど、そんなこと全然関係なかった。印刷屋だろうが蕎麦屋だろうが、必死で本気で生きてれば、すぐつながるわけです。どれも人間がやっていることだからさ。役者って、何も特別の職業じゃない。普通の人間の、感情の機微の行ったり来たりを見せるような芝居なら、ちつとも難しいことなんかない。その場で創造して、その場で生まれてくるのが芝居なんだからさ、生意気言うよね」

それで作家と演出家たちのいるこまつ座の居心地はどうだったのだろう。

「井上ひさしさん、それに木村光一さんや栗山民也さんは、ああこもつとも、と思えるダ

メ出しばかりしてくれたから、素直になれた。真面目で純情なことも意外にあるんだね。かつての俺は一間間口の個人商店。精一杯個性が売り物で、素つ頓狂に跳んだりはねたりして、でもちよつと可愛いところあるかな、って感じだった。こまつ座に入ったら、はね方も昔の五分の一ですよ。いろんな個性を持った人たちがいて、そこで俺が俺と言ったんじやあ、まとまりがつかない。それに俺、アカデミックコンプレックスもあったからね。いい機会だからまとものにちゃんと芝居をやつてやろう、という気になった」

こまつ座でのすまさんの舞台は、欠かさず観ている。『日本人のへそ』『きらめく星座』『国語元年』。中でも『父と暮せば』では、原爆で一人生き残り、生きていくことの後ろめたさに悩んでいる娘を、優しく励ます父親（幽霊）の役が素晴しかった。そして極め付は『人間合格』の中北芳吉役。津島家の番頭さんで、東京へ若旦那（太宰治）を迎えに来

で、弘前弁で数え唄を十番まで歌い終えない
うちは決してやめない。私は録画してあるこ
の名場面はちゃんとテープの頭出しがしてあ
って、たまに見ては一人で笑い転がっている。
この役ですまさんは紀伊国屋演劇賞個人賞を
受賞した。

「あのころ目茶苦茶な酒の飲み方をしたせい
で、その間に二度も大病をしてますよ。まづ
は平成十一年、『イーハトーボの劇列車』の
稽古中。みんなと一杯飲んで別れて、元気に
帰宅したら夜中に血尿が出て、検査結果は膀
胱がん。初めて稽古半ばで役をおりて、代役
は佐藤慶さんだった。次はその二年後で、脳
梗塞。朝、参院選の投票に出かけようとした
らクラーツと身体がふらついた。日曜なんで、
明日病院へ行くよ、ってのん気なこと言っ
たけど、カミさんが救急車を呼んで病院行っ
て、そのまま四か月の入院だった」

カミさんというのは、すまさんのアングラ
時代に共演した女優の石堂洋子さん。

平成十六年、すまさんは十年ぶりに『人間
合格』の中北芳吉の役を再演したが、プログ
ラムにこんな談話が載っていた。

「彼（中北芳吉）の弘前弁をかりて言うなら
左半身の手足はまだエヌのへ（犬の屁）役立
たず）。でも彼の台詞をかりて言うなら、ゆ
つくりとですよ、走れば転ぶべねは、でゆこ
うと思っております」

すまさんの最近の舞台は『クラウディアか
らの手紙』『天切り松く闇がたり』『美しき
ものの伝説』『マクベス』など、多岐にわた
っている。『異人の唄』（土田世紀作）では
久々に木場勝己さんと共演した。木場さんは
すまさんの最初の大病の少し前に、『栄養映
画館』（竹内銃一郎作）という二人芝居で親
しく地方公演にも出かけた仲だ。

『栄養映画館』は、イヨネスコの『椅子』
のパロディ。『椅子』のほうは、湖のそば
の周りから閉ざされた場所に住んでる老夫婦

が、お互いに愛し合って褒め合ったりしながら暮してて、あ、誰か来た、と言つては椅子を用意して、椅子だけがどんどん増えて行く、つていう芝居でしょ。『栄養映画館』はまず椅子がゴソツとあつて、俺監督、木場ちゃん助監督。二人で映画の完成試写会やるつていう日にお客はちつとも来ない。そのうち予約の電話がかかってくる。それで席取るために物を置いて行く。ネクタイとか上着とか。二人ともパンツ一つになつて、もう置く物がなくなつて、裸になつても客は誰も来ない、つて芝居ですよ」

この日、インタビューに木場さんが同席してくれていて、話を続ける。

「片岡千恵蔵を想像させる御大と、市川右太衛門を思わせる大將からの電話（笑）。お互いに張り合つて、あいつが五人なら俺は十人とか、口約束はどんどん増えるけど、最後まで人は現われないという愉快な芝居で、なぜか岩手で目茶苦茶に受けましたね。あのころす

まさんの血圧がすごく上がつてて、でも興業保険の金額がえらく高くて掛けてなかったから、中止になったときの保証がない。心配しながらずっとやっていただいて、本当に申しわけないことをしたと思つてます」

するとまさんがアングラ時代のアドリブの乗りで、切り返した。

「今はもう出来ないね、あの芝居。手術した身体じゃ裸になれないし、古今亭志ん生（身障）者だからね、俺は（笑）」

（この項おわり）

江戸を歩く

増上寺から江戸城へ

第十五回



森清鑑

大江戸ウォーカー

増上寺から潮見坂へ

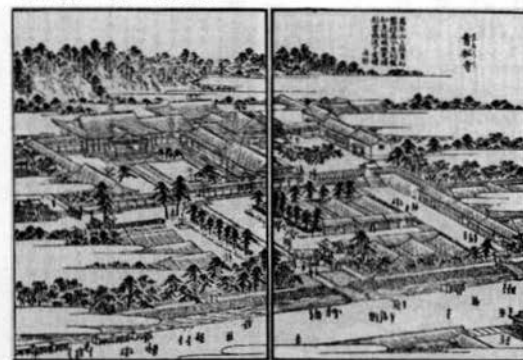
増上寺の御成門を出ると、眼前には広小路（愛宕広小路）があった。いうまでもなく、御成門は將軍参内の専用門で、一般の人々は出入りができない。しかし、この門を出るとしよう。その場所は、現代の御成門交差点の中央に在る。門を潜ると増上寺を巡る櫻川の橋。門は、増上寺広度院御本坊（御成門小学校）に接している。御本坊は、広場にせせり出る形で存在している。愛宕広小路は、増上寺に沿って、東西、現在の慈恵会医科大学、御成門中学から愛宕署まである。この横長の広場の先は、大名上屋敷がお城まで連なっている。広度院御本坊の前には、馬場があり、ここが上級武士の稽古場。そして馬場の左側が、「青松寺」である。この寺の前を、お城に向かって真つ直ぐ行く道が愛宕下通。道の左側は、青松寺、愛宕権現社、多数の子院が連なる。道の右側一帯は、武家屋敷である。これ

ら愛宕山を囲む寺群は、広大な増上寺から地続きのように江戸城に向かって延びている。

愛宕下通の左側、すなわち寺社に接する門前には、外堀から流れてきた櫻川があり、この川は、そのまま御本坊、御成門の前を流れ、増上寺学寮をぐるりと囲み、赤羽川（古川）に注いでいる。川を渡って

青松寺に入る。江戸時代の寺領は、現代の数倍はある。曹洞宗江戸三寺に数えられる大寺院。太田道灌が雲岡舜徳を招聘して文明八年（一四七六）に創建。当初、麴町貝塚にあったものが江戸城の拡張により当地に移転した。櫻川を渡ると総門。そこから本堂まで一直線に広大な社が並ぶ。境

◆青松寺 江戸名所図会



内は松と梅で有名であった。その荘厳で美しい景色は、服部南郭も文字にしたためている。家康はこの寺に深く帰依した。愛宕山、青松寺、そして菩提寺の増上寺は、家光初め歴代の將軍の参詣ルートである。青松寺の景色は、長谷川雪旦が描く江戸名所図会にくわしい。手前の道が愛宕下通で、櫻川がはつきりと描かれている。この寺の境内に在った学寮が今日の駒澤大学へと発展した。

愛宕山

青松寺を通り過ぎると、愛宕権現社。櫻川の橋を渡ると、総門、鳥居、そして急な男坂の石段が木々の合間を縫って頂上に達している。愛宕山丘陵は、高さ二十六メートルに過ぎなかったけれども、江戸の町を一望できた。幕末。フェリックス・ベアトは、愛宕山東一帯の通称「愛宕下」を五枚の写真で捉えている。眼下に武家屋敷が展開し、その先は江戸湾である。想像以上に美しい建築美。写真中

央の屋敷長屋は、伊豫松山藩、松平隠岐守十五万石（一万五百八十七坪）の上屋敷であろう。すると、左の屋敷は、御老中、長岡藩、牧野備前守のものと思われる。幕末、勝海舟は、度々、西郷南州を愛宕山に誘い、この景色を見せて、「これが灰になるのは忍びない」と漏らした。南州は、無言で頷く。

男坂の石段といえは、宝井馬琴の講談、曲垣平九郎（まがき）、「寛永三馬術」の名調子を思い出す。家光が増上寺参拝の折、山上に梅の花が咲いているのを見て、「誰か馬に乗ってあの枝を取って参れ」。この急な石段は、歩いて上り下りするだに、ちょっとした勇気が必要。まして馬に乗ってなご命がけ。家臣一同、皆、下を向く。家光、機嫌が悪くなってきた

愛宕山から江戸湾を望む（ウキベディアよりベアトの写真）



ところに、名も知らぬ一人の武士がバカッ、バカッつと登り始めた。「あの者は誰だ」と家光。近習の臣は誰も知らない。すると、「おそれながら、丸亀藩の曲垣平九郎と申す者でございます」の声。平九郎は見事に梅を手折り、八十六段を下りて家光公に献上。家光公。「そちは日本一の馬術の名人だ」。これ以降、人々は、男坂を「出世の石段」と呼ぶようになった。

山上にある愛宕神社は、もともと江戸城南方の鎮護として家康の命で建立されたものである。祭神は「勝軍地藏(しょうぐんじざう)(行基作)」。地主神は毘沙門天。「天下取りの神」、「勝利の神」として知られ、各藩の武士はこの分霊を郷に持ち帰り、各地に愛宕神社を祀った。

万延元年三月三日。「桜田門外の変」。大老、井伊直弼討たる。水戸の浪士達は雪が降りしきる山上に集結し、神前に祈願。桜田門に向かった。

愛宕山をぐるりと囲んで居並ぶ寺院の数

は、ざっと三十三。愛宕下通に沿って大きな寺社では円福寺から真福寺まで。この風景は、長谷川雪旦が描いている。

愛宕下通

愛宕下通を歩く武士の一団、籠、ぼてふり



◆男坂石段を上から見下ろす

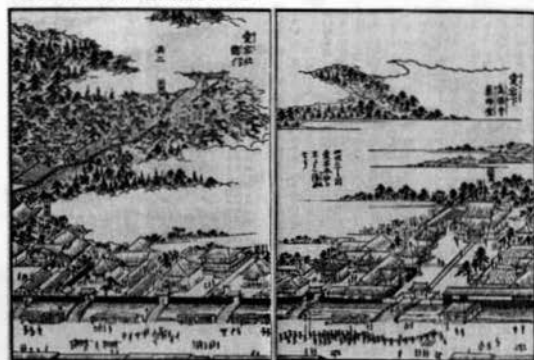
◆石段の上にある平九郎手折れの梅



(行商人)。櫻川には、寺社に入るため、何本もの橋が架けられている。左は愛宕社の女坂。右辺が真福寺薬師堂である。道を挟んで愛宕山の前は、大名屋敷(現、慈恵医大など)。真福寺で一群の寺社地は終わる。この寺に沿って左に曲がると、鎧小路。さらに、お城に向かう。ここからは、道の左右が武家屋敷。鎧小路の次が三斉小路。その前が田村右京大夫の中屋敷。手前の真福寺正面から右に曲がる道があり、その名を薬師小路。これを行けば、武家屋敷の塀を左右に見て愛宕下大名小路にぶつかる。この道は、御成門前広場の右端から発し、お城に向かう道である。その角地三千四百四十坪が田村右京大夫の上屋敷で、ここで忠臣蔵、浅野内匠頭が切腹した。田村は、三万石の大名。浅野は五万石。格上の大名を庭先で切腹させたというので、随分と恨まれたらしい。しかし、綱吉の幕命なのだから致し方ない。彼は、頼まれもしない損な役名を担ったことになる。

愛宕下通に戻って、さらにお城に向かって歩くと、左側、三斉小路の次が藪小路である。その間に、道に面して滋賀、加藤越中守の上屋敷があった。竹藪が多かったので処の人は、藪加藤と呼んだ。この地点をお城側から増上寺に向かう冬景色を、広重が描いている。右下が櫻川である。加藤屋敷の竹藪が見える。先の森は、愛宕山。木々の下に、真福寺の山門が見える。左の侍屋敷は、土方備中守上屋敷(二万一千石)。人々は、番傘や蓑を羽織って雪の中を歩いている。ここ藪小路からお堀までは近い。左右、大名上屋敷の塀。すぐに外堀に架かる、新シ橋が見えてくる。

◆愛宕山 江戸名所図会上巻



西久保通

愛宕山の西側を愛宕下通と並行して堀に向かう道が西久保通である。御成門前の広場を左に行き、増上寺松蓮社から芝切通を登り、岳蓮社を右に曲がる。すると、青松寺裏側の門前町がある。ここを歩くと、麻布飯倉から来る道にぶつかる。これが、西久保通。現在の桜田通りである。江戸期は、風情のある道であった。ゆるやかな坂を下りつつ、外堀に向かうと道に面した右側一帯は、天徳寺の壁塀。位置からいえば、ちょうど愛宕山、青松寺の裏手に当たる。その寺領は、現在の五倍はあろうか。浄土宗江戸四ヶ寺の一つ。ここは、幕末まで数十に及ぶ藩主菩提寺であった。本誌「出雲紀行」にも記した、出雲松平家（松平治郷、不昧公）の菩提寺でもある。幕末、北蝦夷国境問題でもめた、ロシア大使、ムラビエフとの外交交渉が行われたのも当寺である。天徳寺を過ぎると、道の右側沿いに、お



◆広重の江戸百景散歩「古地図」

◆広重の江戸百景散歩「愛宕下駄小路」



よそ十二の寺院が連なる。道の左側は、西久保車坂町の家並み。天徳寺の北側壁に沿って右に折れる(その先は、現代の愛宕山トンネル)。すぐ左に折れると、これらの寺院群を割り入る道がある。この辺り、様相は一変しているが、道自体は、江戸時代と同じ位置にある。ここを行くと、右手、愛宕神社の裏側に栄閑院がある。

栄閑院は、天徳寺の子院で猿寺として有名であった。寛永の頃、猿回しに扮した盗賊が寺の住職の導きで改心し、僧侶になった。この喜ばしい事績が話題となる一方、人々は、猿の芸を度々目にしたのであろう。門を潜ると、猿の彫刻がある。しかし、この寺は、杉田玄白の墓所がある寺として今日名高い。正面の本殿右脇に回り込むと墓がある。墓石は「九幸杉田先生之墓」と彫られている。「九幸」とは、彼の晩年の号。八十五才で没するまで、この長寿を初め、多くの幸運に恵まれたという意味である。

杉田玄白は、小浜藩(福井県)の藩医。ある日、平賀源内らが主催した物産会に参加。これを機に同じく医者の中川淳庵、前野良沢、桂川甫周(桂川家は六代將軍家宣からの御典医)等と交友を深めた。そして蘭学を学び始める。やがて、中川淳庵がオランダ商館から医学書『ターヘル・アナトミア』を持ち込む。中津藩(福岡)藩医の前野良沢も手に入れる。その時、小塚原刑場で一同、罪人の腑分け(解剖)を実見。その書の余りの正確さに驚く。ここから四人協力し、三年半をかけて、これを訳す。『解体新書』は、桂川の父、甫三の推挙により將軍に内献。晩年、十一代將軍家斉に拝謁、回想録として『蘭学事始』を執筆。これは後に、福沢諭吉(中津藩)によって公刊された。中津藩邸内(築地聖路加病院脇)の前野良沢邸に集まり、翻訳した因縁でもあろう。桂川甫周は、顕微鏡を医学利用した初めての日本人として知られる。家斉にその使用法を教授し、普及に努めた。平賀源内との交友に

始まった、杉田玄白の幸運は、正に「九幸」であった。

栄閑院を出て、再び西久保通に戻る。西久保新下谷町と車坂町を左に割って入る。松平右近将監(島根)上屋敷の塀を巻いて潮見坂下に出る。坂を上り始める。左側、この屋敷に続いて、川越藩、松平大和守十七万石、約九千七百坪の上屋敷(旧大倉高商、現新日鉱ビルからホテル・オークラまで)。両屋敷の間に江戸見坂が大和守屋敷東壁に沿って、左に迫り上がっている。この上がり口の右手が御書院番、仙石治兵衛、約千五百坪の屋敷(現新日鉱ビルのほぼ前、発明会館、日本消防会館の土地)。元禄時代は、仙石家の先祖、幕府大目付、仙石伯耆守の屋敷であった。主君の仇を討った内蔵助は、泉岳寺に向かう途中、吉田忠佐衛門等を、この仙石屋敷に出頭させ、討ち入りの顛末を報告させた。そして泉岳寺の浅野内匠頭墓前で報告を済ませた後、一同揃って再び仙石邸に赴いた。その時、浪士達

が足を洗ったとされる「義士洗足の池」が邸内にあったといわれる。赤穂浪士達は、ここから各藩邸にお預けの身になった。

潮見坂を登り切ると、霊南坂下にぶつかる(米国大使館)。すなわち、大和守、上屋敷の西壁は、霊南坂に接していた。潮見坂、霊南坂、江戸見坂に挟まれた、この広大な土地が明治になって、大実業家、大倉喜八郎(大倉財閥創始者)の邸宅になった。彼は潮見坂に面した、その一角に大倉商業学校(後の大倉高商、現東京経済大学)を設立したのである。

◆杉田玄白墓



【参考文献】

ウキペディア 愛宕山の項
江戸名所図会 角川書店刊
広重の大江戸名所百景散歩 人文社刊

その後、互いに言説無くして、上人帰り給いて後、法印宣のたまいけるは、「法然房は、智慧深遠なれども、聊いささか偏執の失有り」と。上人、このことを返り聞き給いて、「我が知らざることには、必ず疑心を起こすことなり」と宣いける。

〔顕真法印との問答〕「四十八巻伝」第十四巻

その後、(顕真法印と法然上人は)お二人とも押し黙ってしまわれて、法然上人がお帰りになった後で、顕真法印は「法然房は、なるほど智慧は奥深いけれども、いささか片寄ったものの見方になっているのが欠点である」とおっしゃった。後日、法然上人がこの顕真法印の物言いを巡り巡ってお聞きになって、「自分の知らない事については、誰しも必ず疑いの心を起こすものだなあ」とおっしゃった。

無量寿・無量光——我が知らざることには、必ず疑心を起す——

去る二月二十八日付の新聞各紙に「太陽系九番目となる未知の惑星が海王星の外側に存在する可能性の高いことを神戸大学の先生方が、詳細な理論計算で世界で初めて突き止め、今後、観測体制を整えば、十年以内にも発見される可能性が高まった」という報道が掲載されました。その新惑星の太陽からの距離は、地球と太陽との距離を一天文単位とすると、一〇〇から一七五となるそうです。ちなみに、現在もっとも遠い惑星である海王星の距離がおよそ三〇天文単位ですから、途方もなく遠い、それこそ天文学的数字と言えましょう。

学生時代、「水・金・地・火・木・土・天・海・冥！」と覚えてきた太陽系の惑星から、あえなく冥王星が格下げされてから、わずか二年後の発見で、宇宙物理学の日進月歩のスピードに、ただただ感服すると共に、いまだに未知の世界が無量に広がっていることをあらためて思い知らされた感があります。

昨年末、国会で「宇宙人が攻めてきたらどう対応するのだ！」との大まじめな質問を契機に、国内のワイドショーを物知り顔の方たちが賑わし、海外でも半ば嘲笑と共に取り上げられたのは記憶に新しいところです。

そうした、かまびすしいUFO論争はさておき、石原慎太郎都知事がよく引き合いに出す、ブラックホールや宇宙のはじまりについての研究の第一人者で

ある宇宙物理学者ホーキングさんによる、今から二十五年程前の記者との次のような質疑応答は実に秀逸です。ある記者が「地球程度に文明が進み、宇宙船を飛ばすような文明を持った惑星は、この宇宙全体でどれくらいありますか?」と質問したのに対し、ホーキングさんは「二百万程」と応じられました。すると、別の記者が「それほど多く地球並みの文明を持っている惑星があるのに、なぜ地球にUFOや宇宙人がやってこないのですか?」と質問すると、ホーキングさんは「その程度の文明が進んだ惑星は、星としての循環が狂って不安定になり、宇宙全体の時間からいうと、瞬間的に消滅します」と答えたそうです。さらに、その瞬間的な時間について質問があると、ホーキングさんは「百年程」と答えたそうです。

かつて私も、学生時代、今から約一五〇億年前、ビックバンによって誕生したという宇宙に関する本を数冊読み、感動した記憶があります。科学者たちの研究によれば、この宇宙が誕生する以前には、母なる宇宙（マザー・ユニバース）や祖母にあたる宇宙（グランドマザー・ユニバース）が存在したとも、あるいは、虚数の宇宙が存在したとも言われています。また、今この瞬間も一秒間に数キロメートルというスピードでどんどん大きくなっている私たちの宇宙

は、いずれ収縮に転じるというのです。

それにしても、天空に広がる宇宙の生成は、私たち人間のちっぽけな思いを遙かに超えた「阿弥陀―無量―」の世界と言えましょう。もちろん、今後人類の叡智は深まり、宇宙生成の謎も、少しずつ明らかになっていくことでしょう。しかし、その一方、未知の世界も、同じように私たちの眼前に広がっていくことでしょう。法然上人による「この数、二乗・凡夫の数え知るべき所にあらず。故に無量と云うなり。(阿弥陀さまが具えておられるご寿命は、しやうもん声聞や縁覚えんかくという位の方はもちろん、迷いの世界を離れ出ることができない私たち凡夫が数えても量り知り得るようなものではありません。ですから「無量」と申し上げるのです)」（『逆修説法』三七日）とお言葉に一脈通じるものがあります。そして、こうした「阿弥陀―無量―」の世界を、ご修行の末、ご自身の内に体得されたお方こそ阿弥陀さまに他なりません。ですから阿弥陀さまを「無量寿仏」とも「無量光仏」とも申し上げるのです。

冒頭のご法語は、こうした「阿弥陀―無量―」の世界を頭ごなしに否定し、物知り顔に振る舞おうとする私たち人間の悲しい性さがを知り尽くされた法然上人の深い嘆息でもありましたでしょうか。

合掌（林田康順）

法然上人
とその
時代

シリーズ第四章



壇ノ浦へ

第六回

作

石丸晶子

画

アーサ

十六

神器奉還じんぎほうかんの院宣を拒絶した屋島の平家にはどなく伝わってきたのは、頼朝の命令で重衡しげひらが鎌倉に護送された、といううわさであった。

また続いて平家を襲ったのは、清盛の嫡孫ちくそん維盛これもりが、屋島を脱出して高野山に上り、熊野灘に身を投じた、という事態である。

伝えによると、美貌の男女ぞろいであった平家の公達きんだちのなかでも、維盛の美しさは際立ち、容姿はいうに及ばず、出処進退における身のこなしの美しさは筆舌の及ぶところではなかったという。

平家全盛の日のことである。宮中で後白河法皇五十の賀が祝われた。そのとき維盛は桜を頭に挿して「青海波」を舞ったが、その姿は風に匂う花さながら。あまりの美しさに法皇は涙を流し、殿上人どんじやうじんの一人は「わたしが維盛のように美しかったならば、死ぬに死にきれまい」と嘆息した。

しかし、卓絶して美しくはあっても、彼は武将ではなかったのである。源平合戦のはじめ、かの有名な富士川の戦いで、水鳥の羽ばたきに敵の夜襲かと驚いて、戦わずして都に逃げ帰ったのは、平家方三万余騎の大將軍維盛二十一歳であった。

また平家都落ちのときのことだ。一門の多くが妻子を伴ったのに対し、彼は苦勞をかけたくないといって、北の方と、六代ろくだい、夜叉やしやという二人の子を都に残して、単身西海に落ちていった。

が、この時、妻子への思い断ちがたく、なごりを惜しむのあまり一門の都落ちに大幅に遅れて、後を追ったことが『平家物語』には記されている。

維盛は容姿、立ち居振る舞い、ともに優美な青年であった。よき家庭人でもあった。が、戦時において必要な、決断力と行動力を持つ武人ではなかったのである。

一方、平家一門における維盛の立場にも微



妙なものがあつた。

彼の父は清盛の長男重盛で、この重盛の一家を小松家という。

しかし重盛は嫡男ではあつても二位の尼時子の子ではなかつた。清盛の先妻の子であつた。それでも重盛が生きていた時は平家の嫡流として一門から遇されてきたが、重盛が父清盛に先立つて死去してしまうと、一門のうちに占める小松家の位置には微妙なものが生じてきたのである。

清盛の次男で時子が生んだ宗盛が平家の次の棟梁と目され、その他知盛、重衡ら、時子の子供たちが一門の主流になつていったのだ。勢い、時子の流れではない小松家の人々は、平家のなかで次第に浮き上がった存在になつていった。

さらに悪いことには、建春門院に仕えて新大納言局といわれた維盛の妻は、平家打倒の鹿ヶ谷事件の首謀者として殺された、藤原成親の娘であつた。

そしてその上にも、小松家には一門の人々に対して、さらに大きい負い目があったのである。

屋島に平家が本拠地を築いて間もなくのこと、鎌倉の頼朝は、池の大納言家に対するのと同じく、頼朝の命の恩人として小松家の人々のことは少しも意趣に思うところはなく、鎌倉で厚遇したい、と伝えてきた。「平家一門中、頼朝の命の恩人である池の大納言家と小松家の人々は、鎌倉に身を寄せよ」というのである。

なぜ頼朝がこんなことを言うかといえば、話は平治の乱のときに遡る。敗れた源氏の棟梁義朝は殺され、捕らえられた嫡子頼朝は当然殺されるはずであった。

しかしその時、清盛の義母池禅尼は、当時十三歳の頼朝が亡きわが子によく似ているといつてその助命を清盛に哀願し、清盛の嫡子重盛も又、強く池禅尼の願いを助けたのであった。

「禅尼と重盛のお蔭で、平家は今、かかる悲運に見舞われている……」

頼朝が平家打倒に兵を挙げて以来、平家一門を襲った思いは、この悔やんでも悔やみ切れず、齒軋りしてもし切れぬ、慙愧の念であった。

十七

そんな小松家の人々は、頼朝が旗揚げして以来、一門の人々が彼らに心を開かなくなってきたことを思わずにはいられなかった。何かよそ者のような居心地の悪さが、たえず維盛たちの心にわだかまっていた。

あまつさえ維盛は都落ちに遅参し、さらには先ごろの一の谷と生田の森における合戦にも、体調不良をもって参戦しなかった。維盛は屋島にいつまでも残っていたのである。

当然のことながら、多くの武将、兵士を失って屋島に帰還した一門の人々が維盛を見る目は冷たかった。

その視線を感じながら、彼の心はひとり合戦からは離れて中有を彷徨つていた。

―都が恋しい、恋しい、妻に、六代に、夜叉に、今一度逢いたい、逢いたい……

思うことは、針のむしろにいるような屋島からは離れて、妻や子に逢いたいということばかり。院宣の来島も、その院宣を拒絶したことも、彼には関心がなかった。どうでもいいものになっていた。

それよりも、平家が勝とうが負けようが、勝負がつくまでに越えねばならない困難に満ちた歲月こそが、途方もなく耐え難く思われる。

その、長短もさだかでない歲月に耐える意志と力を彼は失っていた。

「重景」

と維盛は側近を呼んだ。重景は父子二代に亘つて小松家に仕え、父景康は重盛の乳人子、重景自身は維盛の乳人子で、父子二代に亘つて実の兄弟以上の絆で結ばれていた。

「この日頃、思うことは都に残した者のことよ。今一度逢うこと叶わずといえ、生きても無駄な命とは思わぬか」

「お味方、次の合戦に勝利せば、都への帰還、夢ではありませぬ。それまで今しばらくのご辛抱と思し召されませ」

そういつて重景は維盛の顔を仰いだ。合戦に参加せず、この日頃、屋島の仮屋形の奥に引きこもつていた維盛の、一門の多くが日焼けした顔で忙しく立ち動いている中において、ひとり青白く憔悴しているゆえに、かえつて一種の凄美を加えたともいえる顔貌がそこにあった。

「都への帰還か」

重景のことばに維盛は低く笑った。「都は源氏の武者どもで溢れているそう。須磨の海辺で討ち死にしたわが弟師盛の首も獄門に懸けられていと聞く。都は修羅の巷よ。かかる巷に如何にして帰還できようぞ」

それには答えず重景は、

「平家は新中納言様はじめ民部殿などのご尽力にて、次の合戦に備えるべく、西国の者どもを糾合きうごうしております。伊予、阿波、熊野の水軍、それに肥前松浦の水軍など、みなみな平家にお味方を……」

「もうよい。重景」

みなまで聞かずに維盛はさえぎって、

「そなたの言葉を聞いているうちに、心が定まった。われらは明日の早暁、この屋島を離れる。そなた、小舟を用意してはくれぬか」

十八

ハツとして、重景は強いまなざしをあるじに向けた。

「——ご決意なさいましたか」

長い沈黙のあと、干からびた声で重景は訊ねた。咽喉の奥が乾ききっている。

この年頃、小松家とその嫡流である維盛が置かれてきた立場も、美しく優しいけれども戦場では生きられぬ維盛その人の人となり

も、乳人子ちひなごの重景にはよく分かつていた。

「屋島を離れて何処へ赴かれまする」

頼朝から、

「この鎌倉は池殿いけどのに対し、意趣いそに思うところ全くない。京を離れ、鎌倉に來られよ。厚遇いたす」

といわれた池禪尼の子池大納言いけだいなごん頼盛は、一門の都落ちに同行せず、京都に留まっていた。小松家に対しても、頼朝は、

「鎌倉に身を寄せよ。意趣に思わず」

と言ってきた。

であれば、維盛も屋島を離れて頼朝に縋ろうというのだろうか……

しかし、頼朝が何を言ってこようと、現在一門から疎外されているとはいえ小松家の人々は平家の嫡流なのだ。頼朝がそんな嫡流の維盛を鎌倉に呼び寄せて、真実厚遇するとは思えない。それに第一、維盛様ご自身もまさか鎌倉に縋って生き恥を曝さらすようなことはされまいが……

小舟に乗って屋島を離れるとの仰せであるが、それでは屋島を離れて何処へいこうとされるのか。重景があるじのことばにその心を計りかねていると、

「一門の方々は、この維盛をも池殿のごとく二心あるかと見て、打ち解けてはくれぬ。かかるところに心残りはないわ」

日頃の優柔不断に似ず、維盛はきっぱりといった。「われらは高野へ上る」

「…そういえば、以前父君重盛様にお仕え申した斎藤滝口時頼が高野には上っておりましてな」

干からびた声を咽喉の奥から絞りだすようにして重景は答えた。

「それよ。時頼は修行を重ね、念仏に帰依して今では『高野の聖の御坊』と呼ばれていると聞く。太宰府を追われたとき、われらの弟清経は遠い都の法然上人に帰依して柳が浦の海に身を投げ、此度の合戦でも一門多くが上人の教えに縋り、念仏に身を寄せたという」

維盛はことばを切ると、しばし海の彼方に視線をやっていたが、

「都に帰れるのであれば、法然上人の門を叩こう。上人は父上ご在世中、小松の邸へも参られ、われらも浄土の教えを聴聞したことがある。清経は入水する前、それを思い出したというが、京都に在す上人のみ教えを、われらは今、聴聞することは出来ぬ。だが、未だ源氏の手の及ばぬ高野へ上れば、時頼に直接対面することができようぞ」

翌三月十五日の早暁であった。維盛、重景、そして童の石童丸の三人は、舎人・武里が漕ぐ小舟に乗って、ひそかに屋島を離れた。

(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●新

〔特選〕新走り故郷に父も兄もなし

中島富士子

搾りたての酒を故郷から送って来たか、買ったか、ともかくふるさとの味をじっくり楽しんでいるのである。家を出てから何年になるだろう。父も兄ももう居なくなつたなど、あれやこれや思い浮かべて。

〔佳作〕新芽摘み子等に覗かす顕微鏡

金谷 友江

婿迎え標札二つ年新た

山口 信子

新成人晴れ着で占めし船の上

増田 信子

●味

〔特選〕帰省子の食い溜めと言う母の味

浜口 佳春

家庭を持つている者より、学生とするほうが句に合うだろう。食欲の盛んな年頃で、帰っている間にできるだけ食い溜めをしておこ

うと、会話も忘れるほどに食べることに余念がない。母の味がうれしいのだ。

〈佳作〉

聴覚も味覚も健在卒寿翁

佐藤 雅子

ぬくもりで口紅という毒の味

鳥羽 梓

嘗め味噌に寝酒を少し過ぎしける

河野 水虎

●自由題

〈特選〉肉屋への行きも帰りも懐手

直田 豊人

寒いから何か温かいものでもしようというので、買いに出たのだ。肉を入れたビニール袋を手首に提げると、来た時と同じように懐手をして帰る。よく冷える日の、家庭のちょっとした一コマである。

〈佳作〉

夕刊のインクのおい春の雨

内藤 隼人

帳簿には不備あり梅の見頃なり

青山 亜子

遠足のようにつぎつぎ墓巡る

太田 栞

読者の声

関谷子さんの「会いたい人」の連載、いつも楽しく読んでおります。1月号からの「すまけい」さんは特にとても懐かしいです。昔、新宿の小さな酒場のカウンターで、偶然一緒にしたことがあって、いろいろ演劇の苦勞話を聞かせていただいたことがあります。

どちらかといえばアンターグラウンドな系列の方のように思いましたが、まさに「会いたい人」の一人。さすが関さん、核心を突いていて凄いと思いました。東京へはなかなか出る機会がなくなつて新宿でお酒を飲むようなことも、もちろんないのですが、当時、少しだけ交遊のあった歌舞伎や新派そして新劇の人々の逸話がとても面白いですし、あるい

は今回のようにそこから少し離れた俳優の方々が取り上げられるのも、とても嬉しく思います。磨赤児さん、小林薫さんなど、まだまだ怪優もたくさんおりますね。この連載、和田誠さんなども出てきて、関さんの視界の広さに感心させられます。次は誰だろう、と楽しみにしています。

(岩手 寺庭)

1月号の若林先生の「もつとも急ぐべし、もつとも励むべし」の御文章に深く感心いたしました。とくに脳のなかの物差しは、ストンと落ちるようにわかりやすく、若いころは時間が遅く流れ、年齢を重ねると速く流れることの説明として素晴らしいと思いました。

このような人生訓、世界観のようなものが含まれた文章を、もつともとたくさん読みたいのです。

(広島 自営業)

浄土誌上旬会のお知らせ

締切・二〇〇八年四月二十日
発表・『浄土』二〇〇八年七月号
選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

兼題
(季語ではありません)

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上旬会係

野上 自由題

毎月拝読させていただいております。ひとつお願いがあります。ずっと以前、「日本むかしばなし」のような連載があつて、挿絵といっしょにととても面白く拝読させていただいております。法話にも活用できるあのような読み物が復活するといいな、と思つていますが、いかがでしょうか。(千葉 住職)

49

かい 二
三

さっちゃんねネッ

かまちおしろ



この世には佛が許さぬことなどない 岱潤

森達也氏が『死刑』という本を出された。以前ドキュメンタリー映画『A』、『A2』というオウム真理教の信者取材した作品を創られ、話題を呼んだ映画監督・作家だ。私も二年前にやはり彼が創られた『放送禁止歌』という作品のビデオを研修会のために借りたことがあり、多少の親交がある。

森氏が三年以上の時間をかけて遺族、死刑囚、元刑務官、教誨師、元裁判官、弁護士、政治家、そして死刑廃止派の人、存置派の人など、死刑、そして死刑制度に関係する多くの人の話を取材されて作

られている。

森氏も述べている様に、最近では死刑判決が急激に増えている。十年前(九七年)言い渡された人が九人で確定が四人であったものが、一昨年(六一年)は四十四人が言い渡され、二十人が確定した。そして執行もおびただしい。前の長瀬法相は十ヶ月の在任期間中に十枚の執行命令書に署名した。また今回の鳩山法相も就任五ヶ月で、早くも五人の執行を行っている。

元々『死刑』という言い方は正しくない。正確には『殺人刑』と喚ぶべきだ。国が法律に基づいて行う殺人だ。

現在確定死刑囚は百四人。その中には明らかに冤罪と思われる人も複数いる。

雑誌『浄土』 特別・維持・賛助会員のの方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

本当に今のままでいいのか、我々も早急に考えなければならぬ問題のひとつだ。(長)

編集チーフ 編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十四巻四月号 頒価六百元
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十年三月二十日

発行 平成二十年四月一日

発行人

編集人

佐藤良純
大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七
FAX 〇三三・五七八・七〇三六
振替 〇〇二八・八・八二八七

へい もく かい もく
 閉目開目

目を閉じ、目を開く
 観無量寿經

生野善應

亜細亜大学講師
 東京高輪・光福寺住職

まず行動し、そして考えよ。違った体験ができる。

今、バラ園にいるとします。開目とは、意思を働かせて「観ている」のです。バラの色合い、大きさ、咲き具合を観察しているものであって、「見えている」とは一線を画します。いっぽう、閉目とは、バラが「見えている」状態の中で、心の目

を見開いて、バラについての想いにふけることと考えたらいのです。外国で見たバラ園、バラを贈られた自分の結婚披露宴、バラの絵など、想いが膨らみます。方法、立場を変えて違った体験をするのは人間の楽しみの一つです。

法然上人鑽仰会の

本

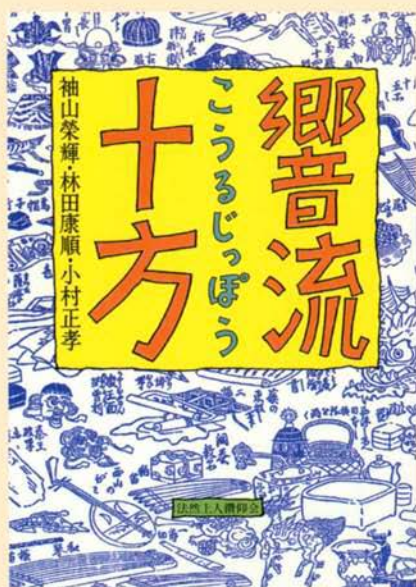
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠一巻本」より